

大学間交流を通じた The Global Week to #Act4SDGs

—「国際平和と人権・人道法研究会」2022年度の活動報告③—

藤 井 広 重

新井廉（4年）、佐藤野乃果（1年）、横井春香（1年）

2022年9月17日に、国際平和と人権人道法研究会は獨協大学法学部鈴木淳一研究室の学生とワークショップを開催した。これは、2022年9月16日から25日にかけて実施されたThe Global Week To #Act4SDGsキャンペーンに合わせ計画され、後日同キャンペーンのウェブサイトでも紹介された。2022年のThe Global Week To #Act4SDGsキャンペーンは「気候」、「正義」、「平和」の3つのテーマに焦点が当てられた。中でも、現在もなお、様々な地域で発生している紛争に対し、国際法を専門に学んできた獨協大学と宇都宮大学の学生が平和の担い手として、どのようなアクションが可能なのか、協働して考え、意見を交わすことで、SDGsの達成に向けたアクションとして本ワークショップを位置づけた。

具体的に、今回のワークショップでは、架空のシナリオを基に学生は3つのグループに分かれ、それぞれのグループ毎に、個別の課題に取り組んだ。Aグループは「アフリカの角をめぐる危機」を、Bグループは「長期化するウクライナ紛争」を、そしてCグループは「ミャンマーにおけるロヒンギャ問題」をテーマとし、各チームには、地域情勢の分析から平和に向けて取るべき具体策、さらにはプロジェクトを進めるための予算案などの提示が求められた。これらの取り組みについて、学生は当日まで概要を知らないため、その場で様々に決断することが求められ、約5時間の準備時間の中で、調査と最終プレゼンの作成を計画的に進める必要があった。

最終プレゼンでは、各グループ15分の持ち時間の中で各々のアイデアが提示された。どのアイデアも

試行錯誤しながらも、現地の情勢を国連公式文書等の英語の一次資料から集め、具体的なプロジェクトとして予算案とともに提案された。プレゼンもデリバリーがよく、質疑応答にも真摯に向かい合っていた。

今回の交流会では、宇都宮大学の学生と獨協大学の学生が互いに協力して積極的に学びを深めることが出来た。国際社会が抱える大きなテーマに対しても、自身の専門分野を生かし、集めた情報をもとに、どのようにすれば自分たちのグループの提案が採用されるのか熱い議論を重ねていた。実際に取り上げられたテーマは、すべて国際社会が直面している課題のひとつとして日々議論されている。日本に住む私たちにとっては、遠い国の出来事と認識されることもあるが、グローバル化が進んだ世界では、紛争や人種差別、難民問題、食糧不足などは、国が離れていても、相互に強く関連している。簡単に解決できない課題であるからこそ、考え続けることの重要性和、具体的な行動につなげるにはどうすればよいのか、現実を踏まえて議論することについて、今回のワークショップを通して改めて考えることが出来たのではないだろうか。

